

第5章 資料編

守トナス。

歌謡

- (一)神殿くまいて見れば神降る如何に氏子の賢とかるん。
- (二)神道は千道百道多けれと申さるる神の通り路。
- (三)神道は伊勢くまいる伊勢小船神船ぞうえ神迎しやう。

氏子崇敬者トノ関係 氏子、延慶殿、家内安全等ヲ祈ル為折居ヲ寄進スル者多シ。

由来伝説 当社ヨリ十三町奈ノ沖二小島アリ殿島神社鎮座ス、住古神職皇宮守年未備日晝夜中参拝ノ際天狗来リテ神祇靈恩ヲ物語リ祭礼ニ天神地祇八百萬神ヲ祭祀シ折居祭ヲ行ヒ白紙ヲ折り刻ミ神二供へ人民ニ復興セハ病氣災難ヲ免カレトノ伝説ニ依ル。

○遼東郡北條町 村社 鹿島神社

名称 權線

祭日 十月三日

行事 例祭神輿渡御当日各町巡幸ノ後午後四時三十分鐘頭取神輿ヲ御船ニ移御ス御船ハ二艘ニテ御神輿二艘ツ、御乗船ス。是ヨリ遼東郡神輿ヲ守護シ權線船ニテ漕キ遼内ヲ三週シ港外ニ出テ大津北條江土手内ノ海岸ヲ權線御船リテ、鹿島ニ到リ宮入りス。權線自ハ八艘、軸二、軸二人、軸二、軸一人ハ、配取舟ヲ漕キ各一、六艘太鼓二人、囃方若干名ニテ軸二名ハ法被ニテ「ボンテン」ヲ持チ、軸二名ハ長襦袢ニテ權ヲ持チ樽ノ上ニテ踊ル漕人ハ白シヤツ黒襦袢ヲ掛ケ船ノ裝飾ハ二艘ヲ合シテ固懸ヲ附シタル笹花ヲ立テ、周囲ニ浅黄ニ朱車ノ紋ヲ入レタル蓑ヲ張リ、固懸ニ朱車ノ旗ヲ交互ニ配シタル御引綱シ、赤色ノ吹貝ヲ立テ柱頭ニ日ノ丸ノ旗ヲ立テ、漕ノ下ニ赤白ノ木柵ヲ縛ヒテ垂ラシ中央ニ太鼓釣ル。

へ、御供 神輿出トナルヤ口取ノ權神輿ニ少シ後レテ御旅所ニ至リ、此所ニテ神事終レハ神輿ニ從ヒ神社ニ於テ解散ス。

ト、役者馬ノ侍進 役者馬トハ当日ノ御役ニ立ツ馬トノ意ニシテ乗子口取人及輿上等總勢ナリ、沿道ノ町民ハ随時隨所ニ於テ中食及酒有テ饗應ス。權線ナリ、而シテ其門前ニ御供馬ノ多クヲ祭テ以テ祭門ノ名譽トセリ。

由来伝説 詳ナラサルモ山城國加茂宮ニ於ケル馬ノ行事ニ依ヒタルモノナラン。

○遼東郡菊間町 村社 香野社

名称 薮田初祈禱

祭日 正月十日

儀式 神社境内ニ遺場ヲ設ケ薮田ヲ射テ妖魔ヲ調伏スル法ヲ行フ、其方法 御境内ヨリ其柱ニ堪能ナル弓取三人ヲ選ビ当日早且溜池ニ入り響威沐浴シテ袴ヲ着シ太刀ヲ佩キ遺場ニ入りテ着席ス其前方十数間ヲ隔テ中央ニ鬼一ノ字ヲ記シタル大中小ノ的ヲ置キ神職參進修祓ヲ行フ準備整ヘハ相圖ト共ニ弓取一齊ニ立テ大の的標トシテ射始メ中小ト順次之ヲ射テ式ヲ終ル。

氏子崇敬者トノ関係 当日氏子ハ全戸神社参拝ノ上式ニ列ス。

由来伝説 不詳

○遼東郡鏡村 村社 肥前八幡神社

名称 弓祈禱

祭日 陰曆正月十一日

儀式 師範者前弓六人後弓六人ヲ引奉シテ柱頭ニ參進修祓ノ後意摩祭典終了後境内馬場ニテ射撃距離十間六尺ニ寸的ニ向ヒ前弓後弓交互ニ矢二筋ツ、合計一千八筋ヲ射ル。

氏子崇敬者トノ関係 約十年ヲ一期トシテ氏子中男子全

歌謡 ほーおんえ(報恩會)ほーおんえ(奉覽會)ヨヤサノサツサ、ヨイヨイ、ヨイト、ヨイマカヨイトセ。

由来伝説 古ノ伝フ所ニ依レハ往時鹿島ノ岩笠殿ト戦フ初鹿島二鎮座マシマス武藏親命経津主命ノ二神ニ戦捷ヲ祈願シ闘ヘハ勝チ攻ムレハ取ルノ運戰運勝ヲ結言語勇士ハ種々ノ旗幟ヲ翻シ太鼓鉦ヲ打鳴ラシ戦ヲ打テ勝拍子ヲ翻ヘ權又ハ「ボンテン」等ヲ打振リ軸輿ニ立テテ謝恩ノ歌ヲ高唱シ催進シテ歡喜ノ色ヲ表シ戰捷ノ祝賀ト奉書ヲ兼ネ行ヒタルカ爾米鹿島神社ノ神事トシテ奉書奉テ奉仕スルニ至レリ尚旧幕時代西國ノ木小松參勤交代ノ為沖合通過ノ際波裏神ノ激烈ナル潮流ニ帆漕意ノ如クテラス当派青年ニ依リシ其引船ニ此權線ヲ以テセシカ何レモ其壯烈ナルコトヲ賞讃セザルハナカリキト。

○遼東郡乃万村 県社 時雨神社

名称 悪病除祈禱

祭日 正月一日ヨリ七日

儀式 祭日七日間ハ神職參進シ毎日午前午後二回祭儀ヲ執行ス、此祭儀ニハ担餅ト称シ赤白ノ餅ヲ炊ク木ニ差シタルモノヲ獻ジシ後參進者重ニ氏子民ニ分ツ。

神祇 最終日祭人舟ヲ奉納ス。

氏子崇敬者トノ関係 氏子以外ノ崇敬者ハ遼東郡志部及広島郡島嶼部ニ及ヒ此七日間ハ大多数ノ参拝アリ神侍守札ヲ拜受シ船ヲ例トス。

由来伝説 此七日間ニ参拝スレハ其年中悪病ヲ除クトノ伝説アリ其起源等明カナラサレトモ惡病除ノ神トシテ一般ノ崇敬篤カリシコトハ続日本紀三代夷録等ニ見ユ雖新頃迄ハ全村ノ旧家井原家ヨリ正月元旦青年奉仕ノモトニ六十六村ノ担餅ヲ作りテ奉納シ内三十三村ハ井原家ト稱シリテ部落ノ有志其他各庄屋等ニ分チ残りハ神社ニ於テ之ヲ「ハヤシ」トテ礼ト付ケ一般参拝者二分チナリト云

部其家系ニ依リテ定マレ師範家ニ就キ一司副兼習ラナシ其年最優秀者ノ模範儀式ヲ行フ之ヲ通開ト称シテ盛大ナル祝宴ヲ開ク例ナリ。

由来伝説 氏子ヲ二分シテ各師範家ニ兩儀セシ所道ノ絶滅ヲ防ケリ、方君三發現存シテ承應三年以來連統今日ニ至ル傳説ニハ御師匠儀ノ歌術ヲ用ヒ世襲ニシテ任免ノ權ヲ有シ隨ル形式ナリ、流派ハ源吉次及柳原新藏人即チ柳原懸ナリ座作進退ノ作法ハ小笠原流ニ依ル挨拶等一一定ノ方式アリ古來事年ノ精神修養上裨益ス所尠ナカラス、師範家ハ弓術及右職右射ノ宗家ナリトス。

○遼東郡鏡村 村社 肥前八幡神社

名称 獅子舞

期日 秋季臨時祭(日開祭)

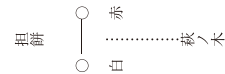
行事 早朝獅子ノ宮出シヲナシ氏子内ヲ巡行ス獅子ハ獅子止、奴(烏毛)腰袋(袋)、太太鼓小太鼓、手拍子ニ伴レテ舞フ先ツ法被御袴ノ烏毛奴坊前道中ヲ書誦シ、義裝シテ太刀ヲ佩ケル獅子止獅子舞ノ前ニ立テ後記ノ歌ヲ唱ヘ終ルヤ、囃子起テ獅子舞ノ動作ヲ始ム。

歌謡 奴 エイコエイヤ、まかしてオツコイソツコイ還るまじぞ、せいにひろもるせいのも、玄國出場先大鳥毛供供脚へてヤツソイ、ふりすてゆくは行列のころのまじせんにつき百万騎治まる御代の天卜茶屋其處で一杯やつてくれ。

獅子止 ヤアク音に聞ゆるせんしはたけとうしは幾人でも獅子でも虎でも来い。

囃子頭 大阪石山脱げたと聞くがはやのせつかの真実かい此処に一の合致監視がら音断おいとしや。伊勢の津よりも松取よりも心とまるは國の地蔵頭が降りやとそ

フ。



○遼東郡菊間町 郷社 加茂神社

名称 御供馬

祭日 十月十九日 二十日

行事 例祭神輿御祭ニ於ケル馬ノ御供ニシテハ、氏子中良馬所有者ハ祭日約一ヶ月前ヨリ使役ヲ廃シ飼養ニ努メ当日神輿ニ供奉セシムモノナリ。

イ、馬數及其裝飾 馬ハ全部牝馬ニシテ其數一定セサルモ毎年百頭内外出場ス、何レモ祭事専用ノ鞍(高鞍)ヲ置キ顔面 籠頭、鞍部ノ附區品ニハ各紋章或ハ具其毛等ヲ以テ飾リ、美麗ナル袖圍ヲ覆ヒテ紅白ノ手綱ヲ附ス。十九日早朝ヨリ乗子ヲ乘セ風強ナル口取人依リテ海ニ引キ入レ「夕暮」ヲナス。

ロ、乗子 七八歳ヨリ十三、四歳ノ男子ニシテ七日ヨリ毎夕海中ニ入りテ垢離ヲトリ神社ニ參拜シテ無罪御供奉ヲ祈ルハ服装ハ白股引ノ上ニ平和ノ扇線ノ細袴ヲ着シ又ハ貴体袴ヲナシ江戸袴ノ手襦ヲ掛ク。

ハ、馬飛込ミ 前日早朝ヨリ柱頭ニ懸テ參集高層ヨリ社前ニ至ル約二町奈ノ馬場ヲ奔走飛込ナス此間乗子ハ手綱ヲ取ルコトナク「ホウイヤク」ノ掛戸ト共ニ両手ヲ拳ケテ左右ニ振ル必ク參集スルコトナシ。

ニ、乗子及馬ノ拝礼 飛込ミヲ終レハ乗子ハ白股引上リ社前ニ於テ拝礼シ馬ハ口取人依リテ右段トニ於テ拝礼セシム。

ホ、馬ノ競走 馬溜リニ休息ノ後數頭ツハ順次馬場ニ出テ競走ス。但シ勝負ハ決マズ。

家島に懸る照らばやりやいぢや生感(生感)は云の宮島隠れは七里、浦上道七英里、安宿の依名の子伏れとりも主と秋別は安幸い恋の衣に身は墨染二度か着りせで露れた。

崇敬者トノ関係 氏子中青年ノ體物ナリ。

由来伝説 口碑ニ伝フ所ニ依レハ約百年前鹿島ノ為ニ始メタルモノナリ。

○夙葉郡庄内村 村社 大元神社

名称 奉射行事

期日 陰曆二月八日

行事 抽籤ニ依リテ当元及当元先古人ヲ定メ祭日二週間前ニ於テ当元ヨリ射手ヲ選定シ五日前ニ当元及射手ノ氏名ヲ神職ニ報告ス。射手ハ二組トシ各三名ニシテ組ヲ前立ト云と他ヲ後立ト云フ而シテ前立ノ位ヲ弓丈儀次ヲ中立次ヲ之夫ト稱ヘ、後立ノ一位ヲ後ノ夫初、次ヲ後ノ中立、最後ヲ弓間ト稱シ射手六人ノ内弓間ヲ以テ兼務トシ技能優秀ナル者ニ當リ射手定マルヤ祭日ノ前日早朝一至二籠リ社前ノ川ニ入りテ身ヲ清メ齋ニ依リテ潔齋ヲナシ、弓矢ノ手入れ及的(大小十二枚)ヲ製ス。當日一同修祓ヲナシ祭事終レテ柱頭ニ「ビシヤ」ト稱スル小のヲ設ケ、之ニ對シテ弓間ヲ試射アリ、先ツ一射手鹿子弓間ニ弓ト二矢ヲ射ク、弓間ニ拍手シテ之ヲ受ケ、射手又ニ一拍手シテ退クヤ、弓間「ビシヤ」ニ向テ射射手射テナスコト二回、斯クテ三回目ニテ射放ツヤ選定タル番ヘテ先ノ如クスルコト二回、其狀先ノ矢ニ於テ五輪ノ猛リ狂フ有様ヲ見奉リ射ストルモノ、如シ、而シテ斯クスルコト三回ニテ隨ニ射止メシムル認ムルモノ、如

ク、静ニ其座ニ坐シテ矢ヲ置ケハ、矢受リテ若初メニ発セシ一矢ヲ執リ来リテ若手ニ持テ、射手之ヲ拭ヒテ羽並ヲ繕ヒ弓闊ニ挿ケハ、弓闊ニ拍手シテ受ケ、更ニ弓ト一矢ヲ執リテ一射手ニ授ク、一射手ニ拍手シテ之ヲ受ケ、弓闊ニ拍手シテ試射終ル。試射終レハ本社ヨリ一町下方ノ林中ニ至リテ前ノ試射ト同一方法ニ依リ試射ヲナシ終レキ本社境内広場ニテテ設ケ置キタル弓場ニ廻リテ弓闊及若射手ノ名刺(長三寸ノ竹ノ一端ニ姓名ヲ書シ各自耳ニ表ニ店ル)ヲ徴召シテ抽籤シテ若部所ヲ定メ弓場ニスタメント称スル雑煮ノ難ヲ受ケ終ラテ若シ、先ツ前立三名ノ内若部ヨリ順次各左肌ヲ脱キテ一矢ヲ放チ、更ニ次ヲ放チテ若置キテ座ニ復ス、矢取ノ者又拾ヒテ前立ノ各人ニ授ク、各人ハ矢ノ手ヲナシ前立座席ニ復スレハ次ニ復立各射場ニ進ミ前立ノ時ノ如ク後ノ矢初ヨリ前立ノ時ノ如ク行ヒ終リテ矢取ノ者約ヲ裏返シ各約ニ向テ二拍手シテ座ニ復ス前立進ミテ奉射シ終ラテ若手奉射スルコト初ノ如ク、而シテ第二ノ約ヨリ第十一ノ約迄ハ裏返スコトナク最後ノ約ニ至リテ最初ノ如ク裏返シ拍手ヲ行フ、此間神職採点ヲナシ、十二個ノ各四十八節ノ奉射終レハ、神職若手ヲ率ヒラ本社ニ至リ採点表ヲ奉リテ此由ヲ報告シ若手ニ其結果ヲ告ケ之ヲ奉射ノ行事終ル。住古若手ハ若手着シタルモ現今ニ於テハ傍ノ道。

由来伝説 不詳

○鹿島郡浦河村 熊造社 大嶋神社

名称 海上渡御宮祭

祭日 陰曆六月十二日、十三日

儀式 毎年六月十一日若宮祭ヲ執行其晩満潮時(午後七時

笹八段、千両楨、小判、鳥帽子未広等二轍シタル十五種ノモノヲ竹笹ニ吊シ社頭ニ懸ケテス。

由来伝説 不詳

○北宇和郡立間村 郷社 八幡神社

名称 卯之刻角力

期日 十一月五日午前四時

行事 時刻社司ト祭員及角力取組、次清殿、次開扉、次献饗、次祝詞奏上、次社司以下拝礼、次角力取組、次角力奉仕(先様太鼓、次表儀、次儀三取組)、次撤饗、次退出

角力奉仕人員 行司一人、東方三人、西方三人、氏子内立間村一定ノ家ノ者代奉仕ス。

方法 土俵ノ中央ニ太鼓ヲ据テ特殊ノ打方ニテ行司ヲ打チ始ムレハ東西ノ力士隔ヲ廻シ、土俵ノ周圍ニ巡ス、終レハ三ノ、東西ニ分レ所定ノ座ニ着キ、次行司東西力士ノ名乗ヲ拳ケ取組マシメ勝負一回ヲ以テ三取組ヲ終ル、各取組勝敗ヲ決セテ、取組ノミヲ行ハシテ最後行司ハ角力ヲ預リトスヘキトテ宣ス。

由来伝説 本行事二國シテハ何等記録ナク其縁起等知悉シ得サルモ此角力奉仕中ハ藩主ノ御社參上禮を社門内ニ入ルヲ許サレサリト言ヘハ如何ニ難カアリ且ツ若部社ト特別ノ縁故アル神事ナリシヲ推知シ得ヘシ、サレ共儀式結構ノ如キモ社職盛大ヲ極メタルモ現今ニ於テハ神ノ其形式ヲ存スルノ、角力ハ拝殿内ニ於テ之ヲ奉仕シ表ハ社庭ニ其型ヲ造リ置ク状況ナリ、伝説ニ依レハ住持此角力ヲ中止シタルカ為其年神輿ノ渡御行ハレサレントアリトテ現今尚此形式ヲ存スル次第ナリ。尚此角力勝負ニ依ツテ年ノ豊凶或ハ力士ノ身上ニ害ヲ及ブアリト言ヒ伝ヘ返リニモ勝負ヲ決スルトナク「御名人二御名人勝負ハ又明年御覽ニ入レマス」とテ毎年預リ置クノ慣例ナリ。

頭)神輿渡御(御懸地河原津ノ海岸ヨリ北方約十五町ヲ距ル、大崎神ノ旅所ニ寄リ渡御、当夜同所ニ御仮泊翌十二日ノ(前晚(自置頭)遷御ス。御石船ハ其年朝庭五艘ヲ撰択シ内二艘ヲ併結シテ周圍ニ注連竹ヲ樹テ、白旗數十個ヲ点火シ神輿ヲ遷渡シ御懸、氏子總代、頭元(警官供奉)他ノ三艘ヲ指定供船トシテ同懸及御懸掛トシテ(書問ハ紅白ノ大森火引船續入ノ横懸軸轆ヲ引き廻ス)白衣ノ輿丁多数乗り込ニ注連竹、其他ノ供船ハ隨意美々シク裝飾ヲ施シ海上ヲ漕キ廻リ又和船渡御等盛ニ行ハシ其壯觀限リナシ。彼岸ニ於テハ兩晩共九ヶ所ニ於テ神樂奏奏シ多数ノ拝觀者集メ盛ニ觀極ム。

由来伝説 不詳

○新居郡神戶村 郷社 伊勢乃神社

名称 神輿祭車及駕頭

祭日 十月二十二日、二十三日

神輿

神輿祭車

例祭神輿渡御ノ際ニ於ケル行事ニテ若部若部ヨリノ奉納ニ依リ御神輿ニ從シテ團陣ハ盛ナラシムモノナリ、神輿祭車(太鼓台ノ類ニシテ「ミコン」ト称シ御懸代ヲ奉遷スル神輿ハ御神輿ト称シ區別アリ)及祭車(今ハ台長或ハ屋台ト称ス)ハ何レモ製作技芸凝シ巧ヲ集メ善美ヲ逞シタルモノニシテ各長技藝等ヲ打鳴ラシ伊勢宣頭ヲ認ヒテ離立ツ。現在神輿祭車四隻、祭車二十三臺ナリ。

駕頭

住古若部ニ依リ神輿ノ御供ヲナス者多数アリ其行装、鹿角冠リ毛織ノ襦袢股引ヲ着ケ長キ以テ袴ヲテ神輿ニ附隨セリ。之ヲ鬼ト称シ其数七、八百トナリ

○北宇和郡成少村 村社 天彦神社

名称 曹根ノ花取餅

期日 八月一日

行事 村社天満神社ニ奉納スル青年ノ行事ニシテ定メ法被ニ股引ヲ穿キ鉢巻ヲナシテ抜刀シ、太刀、小太刀ニ分レ互ニ行キ廻ヒ互御ナス、其種類十四種アリ、此部ノ踊ヲ社頭ニ於テ行フ。

歌謡 其一ノ擧

ひるいちに たつはくばたよ よよにたつは
さいばらよ さいばらとは とくまねして
さいたり さいたり かななごとなり
さむらいとは なごまよけれ

由来伝説 古キ行事ナルモ起源等不詳。

○北宇和郡及手高町中井村 神社ニ於テ

名称 御伊勢踊

期日 陰曆三月十一日及六月十一日

行事 各部落ヨリ大人三名、小人三名宛出場シ少年(佐笠ヲ被リ「レビ」ヲ振り口形ヲ造リテ太鼓及歌ニ合ヒ舞踊ス。

歌謡

御伊勢踊ノ歌
踊りや御伊勢踊をい踊る 御伊勢踊を踊りて思
み見れば 国も豊に 千代も来える目出度さよ 御伊
勢踊の目出度さよ 御伊勢山田の神祭 御伊勢山田の
神祭 むくりこくりを平けて 神よ君よと国々も若君
男女折疊込め 栄え栄ゆる目出度さよ 御伊勢踊を
踊りて思み見れば 国も豊に 千代も来える目出度
さよ 御伊勢踊の目出度さよ 天の信戸の神祭 天の

シト云フ、故ニ之カ取締ノ必要上其頭目トシテ鬼頭ヲ置キタリシカ今猶存シテ神幸ノ祭儀ハ此鬼頭(數十人アリ)ニ依テ警固セラレ一糸乱レシ儀無クニニ執行セラル、ナリ。

氏子崇敬者ト關係 氏子内青年団員奉仕ス。

由来伝説 京都祇園祭ニ類シタルモノナリト云フ其起源等詳ナラス。

○新居郡壹字村 郷社 一宮神社

名称 海上渡御ノ行事

祭日 十月十九日

行事 例祭神輿渡御ノ際ニ海上ニ一年替ヲ以テ行フモノアリ、其海上渡御ハ当日午前八時出御、一ノ鳥居及橋前ニ於テ神樂ヲ奏シ、新田、西原、中須賀、西町、東町ヲ經テ海岸ニ出テ、栗崎出テ渡御シテ「中ス加」ニ上ル、同所新居神社境内ニ於テ神樂ヲ奏シ終テ西町ヲ經テ陸路御トナル、奉納太鼓台ハ社頭ヨリ久保田川原迄神輿(伊勢シ遷御ノ際ハ新居町ヨリ)供奉ス。

由来伝説 不詳

○喜多郡新谷村 郷社 稻荷神社

名称 鎮火祭(伊勢祭、義舞祭トモ言フ)

祭日 陰曆二月初旬

儀式 境内ニ繩ヲ作り周圍ニ注連繩ヲ取リ金二邊ヲ拂シ前二拱ヘ次ニ參拜者二対シ灣ノ中ニ舞入リテ舞ヒ清ム。

由来伝説 天照皇大神天ノ若戸ニ隠レタシ、時ノ神事ヲ伝承シテ行フモノト云フ

○北宇和郡田岡村 村社 住吉神社

名称 十日祇祭

祭日 陰曆二月十日

儀式 十日未明一較參拜若部氏ノ交ケントシテ參拜ノ箱

岩戸の神祭 月に六度の神樂より 千鳥島部世の大々神樂よりも 参り下向の目出度さよ 御伊勢踊を踊りて思み見れば 国も豊に 千代も来える目出度さよ 御伊勢踊りの目出度さよ 東は関東の奥までも 東は関東の奥までも 老若男女おしなべて 参下向の目出度さよ。御伊勢踊を 踊りて思み見れば 国も豊に 千代も来える目出度さよ 御伊勢踊の目出度さよ 西は住吉天三寺 西は住吉天王寺 四国筑紫の人までも 参下向の目出度さよ。御伊勢踊りを 踊りて思み見れば 国も豊に 千代も来える目出度さよ。御伊勢踊りの目出度さよ 御伊勢踊りの目出度さよ 北は越前能登や加賀 北は越前能登や加賀 越後信濃の人までも 参り下向の目出度さよ。御伊勢踊りを 踊りて思み見れば 国も豊に 千代も来える目出度さよ 御伊勢踊りの目出度さよ 千早坂千早坂 御懸に 御樂奉れ 心のまに 願ひ込め 踊り喜ん人までも 年は千歳を保つなり。

氏子崇敬者ト關係 当日氏子ハ一般ニ休業シ神社ニ參拜ス。

由来伝説 不詳

○松山市杉谷町 郷社 惠壽神社

名称 松囃子

期日 二月三日

第5章 資料編

儀式 当日早且神輿ヲ装飾シ、護符給太鼓、次社司以下
 祭員及能楽会員着席、次修験次、禊、次奉幣、次祝詞奏上、
 次社司拝礼、次能楽会員参列、若井礼、次舞囃子(老松、東
 北、高砂)狂言三人夫婦ノ神(狂言、相殿行ハス)次撒飯、
 次直会式、次終太鼓

歌謡 謡曲高砂、東北、老松。

氏子崇敬者トノ関係 松山能楽会員ノ雅ス行事ニテ崇敬
 者トノ関係ナシ。

由来伝説 起源等詳ナラズ、住吉松山藩主人松家ノ願ニ於
 テ毎年一月三日ノ夜盛大撒飯ニ行ハレタリシヲ維新後神
 社ニ移シ毎年之ヲ行フニ至レリ。

○松山市杉谷町 県社 彦根神社

名称 神能

期日 春秋二季月日一定セズ。

行事 当日神前二奉告祭ヲ執行シ終テ奏樂殿ニ於テ能狂
 言敷番ヲ行フ。

由来伝説 旧松山藩主ノ願ニ於テ能楽ヲ行ヒタリシヲ維
 新後能楽東能面調度類ヲ奉納セラレシヨリ神社ニ於テ行
 フニ至レリ。

○今治市別宮 村社 大出神社

名称 御頭(おごご)と御二ツ御頭ノ文字ヲ用ヒタル時代ア
 リ)

祭日及行事

神社参拝 五月十日例祭当日座本及寄頭ノ両人礼服ニ
 テ同伴神酒初興米、鏡餅、榊ノ献上物ヲ携ヘテ参拝ス、
 此参拝アリテ後一般氏子ノ「氏語り」ヲナス氏語ニ「神
 酒初興米、鏡餅等ヲ献上ス。
 御頭口開 一定ノ日時ナキモ御頭開キ三日前ニ執行ス
 御頭当日氏子ノ参列場ノ諸設備ヲナス午後三時頃神職
 現代世話人寄頭ノ家ニ参集演歌ヲナス。

○宇和島市 県社 宇和彦神社

名称 凱旋桃太郎

期日 十月二十九日

行事 桃太郎二扮装セル一名ノ少年及雄牛、犬、猿二扮装
 セル三名ノ少年ハ直垂ヲ着用セル八名ノ少年カ唱フル歌
 謡ニ合セテ鬼ヶ島ヨリ凱旋ノ状ヲ演シ、舞踊ス外二二
 名ノ赤鬼青鬼アリ一名ハ雄ヲ持ちテ前行シ一名ハ宝車ヲ
 牽キツ、随行ス。例祭当日先ツ神社ニ参拝シ拝殿ノ前面
 ニ於テ舞踊ノ神輿出御ニ先ツカ鳥居前ヲ巡行、御旅所ニ至
 リテ再ヒ舞踊ス、又巡行ノ途次氏子総代、神社評議員、区
 長等ノ門前ニ於テモ舞踊ス。

歌謡

一ひけやひけく宝の車 鬼から鳥から取つたる宝 宝取
 つたは日本一の 桃から庄れたこの桃式郎
 二ひけやひけく宝の車 頼んだ宝は金銀珊瑚 綾も飾も
 あるその外に かくれ蓑笠引出の小櫃
 三ひけやひけく宝の車 鬼が鳥から取つたる宝 鬼にひ
 かせて大雄雄が ワンキヤンケンケン囃して行くよ。

氏子崇敬者トノ関係 氏子内裏町五丁目居住ノ少年奉仕
 ス。

由来伝説 古来牛鬼ノ遺物ヲ出ス榎例ナリシカ大正十四
 年ヨリ本行事ニ變更ス。

○宇和島市 県社 鶴島神社

名称 四ツ太鼓

期日 十一月十五日

行事 四ツ太鼓ハ大太鼓ヲ中尺太鼓ニ其間四二四名ノ少
 年ヲ乗セ得ヘキ彫形ヲ組立テ、之ニ長き棒ヲ縦横二通シ、
 多数ノ男子之ヲ肩ニシテ進行シ、ノ「ヨイサ」ノ掛声ト共
 ニ美觀ナル服装ヲ為シタル四名ノ少年太鼓ヲ鳴シ、之
 ニ呼応ス例祭当日先ツ神社ニ参拝シ、神輿出御ニ先テ子御

御頭開キ 一定ノ日時ナキ例祭前後遊歩ノ日ヲ選定、当
 日午前十時頃前記頭元寄頭両名同伴ニテ靴ヲ除ク外、敵
 上物ヲ調ヘ神社ニ参拝ス次ニ神職並ニ氏子一同頭圍ニ集
 合シ「御頭歌」ノ行事ヲナス其方法ハ神職ヲ拝聴シタル
 後神職立合ニテ本年度頭人ヨリ来年度頭人ニ渡シ神酒ヲ
 酌ミ交ス此時謡曲高砂ヲ合唱ス終テ一頭書ニ昨年度以来
 ノ時事問題等ヲ記載ス之レハ慶長年間以來ノ古文書トナ
 リ居レリ)併シテ後二直会ヲナス。

氏子崇敬者トノ関係 頭人ハ二年交替ヲ以テ之ニ当リ旧
 來ノ氏子ニ限り他ヨリ転住シタル者ハ除外ス。

由来伝説 史実ニ微スヘキモノナキモ住吉氏族制度ノ遺
 風ナラン御頭又ハ御當ト稱スルハ其年神社ニ於ケル諸事
 担当者ニシテ氏子ノ頭トシテ一般ニ遇セシモノノ如ク
 住吉ハ頭屋ニ当レル者ハ家格職業ノ如何ニ拘ハラズ總テ
 ノ集合ニ於テ其上席ヲ占ムヤカトス。慶本トハ御頭主
 役ニシテ寄頭ハ其補佐役トス。

○宇和島市 県社 宇和彦神社

名称 神像祭

祭日 一月十一日

儀式 住古ヨリ秘蔵セル古木版ヲ以テ印刷シタル大黒
 神ノ書像十一枚ヲ限り当日早朝ヨリ群衆セル参拝者ニ抽
 籤ヲ以テ授与ス。

由来伝説 不詳

○宇和島市 県社 宇和彦神社

名称 八ツ鹿踊(鹿ノ子舞トモ言フ)

期日 十月二十九日

行事 例祭神興渡御ノ際ニ於ケル行事ニシテ先ト先ト
 社ニ参拝シ拝殿ノ前面ニ於テ七名ノ少年ハ雄鹿ニ扮装シ
 一名ノ少年ハ雌鹿ニ扮装シ各自胸間ニ掛ケタル太鼓ヲ鳴
 シ、歌謡ヲ唱ヘ舞踊シ、神輿出御ニ先テ御道筋ヲ巡行

道筋ヲ巡行シ御旅所ニ至ル

氏子崇敬者トノ関係 崇敬者ノ内裏町居住ノ男子奉仕
 ス。

由来伝説 不詳

○宇和島市 県社 鶴島神社

名称 牛鬼

期日 十一月十五日

行事 当日先ツ神社ニ参拝シ神輿出御ニ先テ子御道筋ヲ
 巡行シ御旅所ニ至ル、牛鬼ハ御竹ヲ以テ頭又ニ組立テタル
 團体ニ赤布若クハ條幅及夜更ノ之ニ鬼首及劍型ノ尾ノ附
 シタル怪物ニシテ、屈強ナル數十名ノ男子ハ其胸内ニ入り
 テ之ヲ鼻上ケ、大黒染ヲ着、雄首ヲ上下シ、神輿ノ前行
 ヲナス、後方ニ多敷ノ少年男子カ竹筒ヲ吹鳴シ、之ニ
 随従スルヲ常トス。

氏子崇敬者トノ関係 崇敬者中兼田居住ノ男子奉仕ス。

由来伝説 口碑ニ依レハ朝鮮征伐ノ際加藤清正カ敵ヲ
 威嚇スル為ニ案出シテ軍中ニ用ヒ始メシモノ、如ク祭セ
 ラルモの雄ナラス、蓋シ支那ノ故事ニ倣ヒ悪魔ヲ拂ヘンカ
 為ニ作觀セシモノナラス。

○宇和島市 県社 和霊神社

名称 田祖祭

祭日 夏至当日

儀式 田植行事執行ノ由ヲ奏上シ併セテ農事ノ盛衰ヲ祈
 請ス。

神祇 氏子中ヨリ十歳前後ノ男子十名ヲ祭員ニ、巫女十
 名ヲ早乙女ニ、四五歳ノ男子数名ヲ祭員ニ、青年生童等ヲ舞方
 ニ選抜シ、小鼓、太鼓、サ、ヲ、手拍子ノ四調子ニ舞樂
 ヲ奏ス。

氏子崇敬者トノ関係 氏子中ヨリ早乙女、舞方、祭員代
 替等選出ス、当日氏子崇敬者御田代ノ周囲ニ群集シ拝觀ス、

御旅所ニ至リテ又舞踊ス、御田代トス、向テ巡行ノ途次氏子
 総代神社評議員、区長等ノ門前ニ於テモ舞踊ス。

歌謡

(一) 廻はれく水車夜ノ廻りて間に止るな間に止るな。
 (二) 中立岩腰にさしたるすだれ柳枝折り細くは外中立
 休み中立。
 (三) 十三から最遅遅れたる麒麟をばこなたのお庭に隠し
 おかれて隠しおかれ。
 (四) 何んは待たても居らばこそ一本世のかげに居るも
 のかげに居るもの。
 (五) 白蟻食あとを思へば立ちかねて水も濁さぬ立しや白
 蟻立てや白蟻。
 (六) 風が霞を吹き拂ふて今こそ麒麟に逢ふぞうれしや逢
 ぶぞうれしや。
 (七) 風船が風の来流を越えかねて爪を削へてはやす面白
 はやす面白。
 (八) 鳥が鶴籠送り面白や一つもすげなやあをちかやせ
 なあをちかやせな。
 (九) 圓からは鶴さぐれと文が来てお眼申してはちかへつ
 いちかへつ。

氏子崇敬者トノ関係 氏子区長内裏町一丁目少年八名奉
 仕スルヲ例トス。

由来伝説 口碑ニ舞謡共ニ藩祖伊達宗公ノ作ニ係ルト
 稱スルモの確ナル証觀アルニアラサルモ、藩祖八郎後仙
 右地方ヨリ伝來セシモノナルコトニ疑ナキ初メ延享五
 ツ鹿ト稱シ五人ノ少年鹿ノ仮面ヲ被リ舞踊シテ大正十
 二年十一月 皇太子殿下行啓アラセラル、ニ際シ古式ニ
 則リ三頭ヲ増シテ八鹿ニナシ右鹿ニ供シタリ。

由来伝説 寛政二年五月宇和島藩医長野田庵、祭神山姥公
 カ当藩ハ赴任ノ当時前代ノ虐政ニ依リ人民瘡痍甚麗ニ呻
 吟シ、アリシヲ救済センカ為専心勤業ニ励ムレシ、徳ヲ通
 懇シ神田奉納ノ上執行タシニ由因ス。

○宇和島市 県社 和霊神社

名称 初卯祭

祭日 二月初ノ卯日

儀式 普通祭式ニ依リ祭神ノ文武二氏カレシ徳ヲ称讚シ
 併セテ還靈還陽ヲ願ヒ舞謡セシムル由ヲ奏上ス。

由来伝説 承応年間神社トシテ祭祀スルニ至リ、時藩主
 伊達宗利及崇敬者ヨリ祭神ノ還靈還陽等ヲ奉納セシラ一
 般ニ勧駕セシム其時ノ同慶セントスルニ起因ス。

○宇和島市 県社 和霊神社

名称 越年祭

祭日 一月六日

儀式 普通祭式ニ依リ氏子ノ無事越年ヲ祈請ス。

氏子崇敬者トノ関係 同夜氏子崇敬者、老幼男女參觀所
 ニ参集シ無事越年ヲ祈請シ、散後各自持前、柱ヲ渡シ翌
 朝日出ト共ニ退散ス。

由来伝説 承応年間田藩内ノ人民祭神ノ生世民衆カ、穢
 粧ヲ辨ハレ無事越年スルヲ得タリ、當時ノ同慶ノ願望ノ
 意味ニ於テ参籠セシニ始リ儀式相傳トナル。

○宇和島市 県社 和霊神社

名称 走り込

祭日 七月二十四日

神事 例年神興渡御ノ際午後七時鐘鳴、御出立ノ同時ニ
 打擲ケル煙火ニ応シ数方ノ老若男女御道筋ニ排列シ拍手
 ヲ以テ奉送ス神輿ノ須賀川ニ出テ給アキテ河川ニ設ケ
 ラレタル數十ノ篝火一齊ニ点火シ、數百ノ男子カ竹筒ヲ
 ス松火ト共ニ炎々々ヲ無ス壯觀アラシメ、數方ヲ参拝者ハ川

ノ兩岸ヲ理メテ人山ヲ築ク新クテ神輿ハ多数ノ輿トシ警衛サレ恰モ海嘯ノ打チ寄スルカ如キ勢ヲ以テ去流運送ニ神幸橋ノ下ニ於テ準備シアル立巻ノ巨櫓ヲ中心トシテ三體ノ神輿ハ渦巻ノ勢ヲ以テ三廻転ヲナス之ヲ終ルト同時ニ數百ノ青少年五ニ手ヲ取り合セ神輿ノ前方約一町ノ間ニ並列シ御道筋ヲ警戒先導ノ任ニ當リ輿トハ成程多クテ一透神社へ疾走シ社前ニ於テ三廻転ヲナス目出處還御セラレル時上流郷川下流ヨリ還御ニ至ル迄ヲ走り及ニ終ル。

由来伝説 元禄十四年六月二十四日宇和島藩主伊達宗資神輿三體ヲ奉納神幸ヲ行ハスルニ始マレ。



県社 浮島神社 村社 三島神社 御面渡御



県社 浮島神社 村社 三島神社 三神ノ御面



県社 伊佐爾波神社 早苗祭神輿渡御



郷社 船越和氣比賣神社 權伝馬 其一



郷社 船越和氣比賣神社 權伝馬 其二



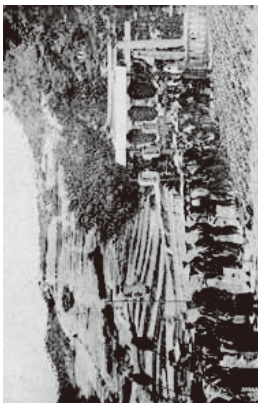
郷社 船越和氣比賣神社 權伝馬 其三



郷社 船越和氣比賣神社 權伝馬 其四



村社 正友神社 初子祭火防ノ神事 其一



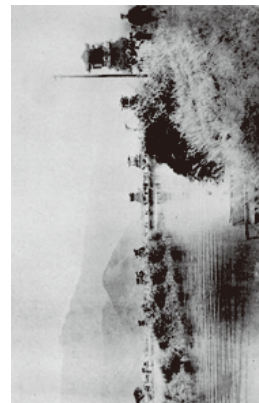
村社 肥海八幡神社 獅子ノ宮出シ



村社 肥海八幡神社 獅子舞



県社 伊曾乃神社 御興菜車



県社 伊曾乃神社 菜車



郷社 加茂神社 御供馬 馬ノ匹供



村社 各神社 蠶目初祈禱



村社 肥海八幡神社 弓祈禱



村社 肥海八幡神社 弓祈禱



郷社 加茂神社 神興渡御 其二



郷社 加茂神社 御供馬 馬ノ飛込



郷社 加茂神社 御供馬 馬ノ集合



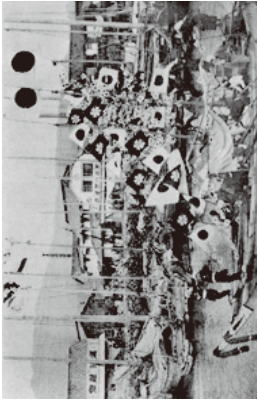
郷社 加茂神社 御供馬 馬ノ競争



村社 正友神社 初子祭火防ノ神事 其二



村社 五十鈴神社 折居祭



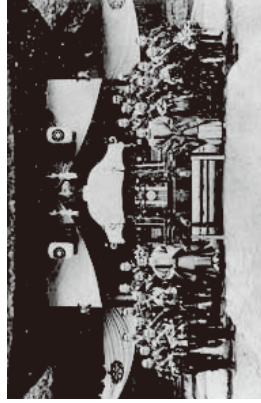
村社 鹿島神社 稲穂



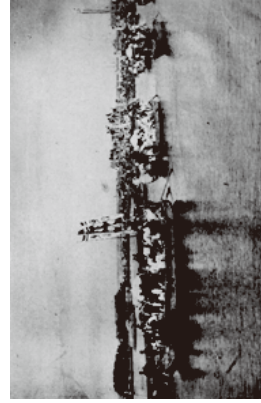
郷社 加茂神社 神興渡御 其一



県社 伊曾乃神社 葉車



県社 伊曾乃神社 鬼頭



県社 一宮神社 海上渡御 神輿



県社 一宮神社 海上渡御 太鼓台



村社 天満神社 花取踊



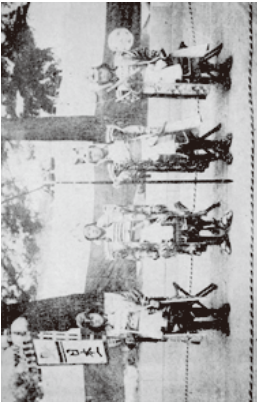
県社 東雲神社 松籬子



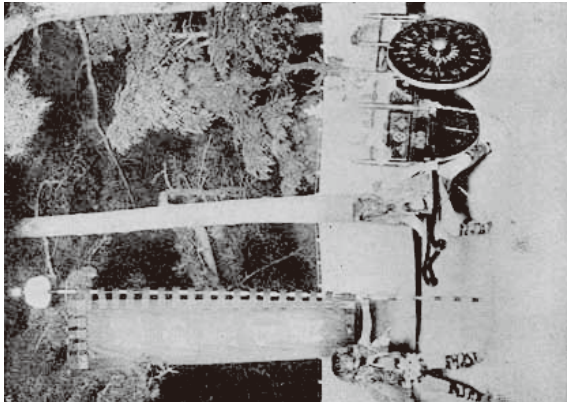
県社 宇和津彦神社 ハッ鹿踊



県社 宇和津彦神社 凱旋桃太郎



県社 宇和津彦神社 凱旋桃太郎



県社 宇和津彦神社 凱旋桃太郎



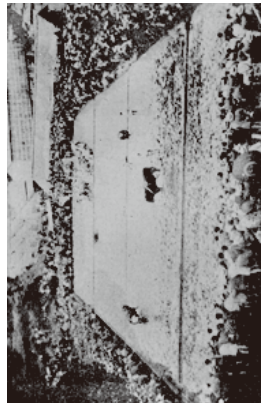
凱旋桃太郎の歌



県社 鶴島神社 四ッ太鼓



県社 鶴島神社 牛鬼



県社 和霊神社 田植祭



県社 和霊神社 田植祭

愛媛県の祭り・行事

—愛媛県祭り・行事調査報告書—

令和6年（2024）3月22日

編集・発行 愛媛県教育委員会

印刷 株式会社プロックス